不登校傾向の中学生における性格的特徴と周囲からの支援との関連
――大学生を対象とした回顧法を用いて――

沖井 仁* 堀井 俊章**

Relationship between Personality Traits and Support from Others in Junior High School Students with the Tendency toward Non-Attendance at School

Jin OKII and Toshiaki HORII

問題と目的

文部科学省（2019）は，不登校について，「児童生徒によっては，不登校の時期が休養や自分を見つめ直す等の積極的な意味を持つことがある一方で，学業の遅れや進路選択上の不利益や社会的自立へのリスクが存在する」と指摘している。また，中学・高校時代に中途退学や不登校などの状態になっている生徒の多くが将来ひきこもり生活に陥る可能性が強いとされており（北村・加藤，2007），ひきこもり群における不登校経験者の割合は 30.6%で，一般群の 5.4%よりも高い（内閣府，2016）。令和 3 年度における文部科学省の調査によると，不登校の児童生徒数は 244,940 名に上り，9 年連続で増加し，過去最多となっている。在籍児童生徒に占める不登校児童生徒の割合は，小学校では 1.3%，中学校は 5.0%，高校は 1.7%であり，特に中学校での割合が最も大きく，中学生における不登校への対応が喫緊の課題といえる（文部科学省，2022a）。

森田（1991）によると，登校しながらも「学校へ行くのが嫌だ」と感じている生徒の存在が相当数確認されており，そのような学校への嫌悪感を「登校回避感情」と呼び，不登校生徒の基礎的な動機感情を形成するものであると指摘している。一方で，渡辺・小石（2000）では，登校回避感情を「嫌悪感」という限局化した感情で捉えず，「不登校でなくても，学校に行きたくないと思う気持ち」と包括的に捉えている。小幡・堀井（2018）も，登校回避感情を「欠席・遅刻・早退などの登校回避行動ならびに不登校の有無にかかわらず，生徒が『学校に行きたくない』と思う気持ち」と定式化している。また，五十嵐（2010）は，登校回避感情を持つ状態を不登校の前駆的な状況として「不登校傾向」と捉えている。そこで本研究においても，不登校の予兆になりうる不登校傾向を「『学校に行きたくない』と思う気持ちを持つ傾向」と捉えることとする。

有賀他（2010）は，不登校にいたる前に支援の必要な児童生徒を発見することができれば，より早期に適切な支援を行うことができ，不登校の予防につながる可能性があることを指摘している。また，文部科学省（2019）は，不登校児童生徒の支援において，予兆への対応を含めた初期段階からの支援が必要であることを指摘しており，このような見解からも，不登校傾向への対応の重要性がうかがえる。中村他（2010）によると，「学校に行きたくない」と感じている者（不登校傾向である者）ほど，活力の低下やイライラ感などの心身の不調と心理的問題を持っていることが報告され，「学校に行きたくない」という感情面に着目した早期の対応が重要であることが示唆される。

不登校・不登校傾向の児童生徒における性格的特徴については，現在までに複数の観点から報告されている。不登校児の性格的特徴について，吉中・工藤（2015）は，

*横浜国立大学大学院教育学研究科大学院生 **横浜国立大学教育学部

先行研究を概観した上で，「内向性・非社交性・神経質・固さ・傷つきやすさ・完全主義などが代表的な性格特性として考えられている」と述べている。不登校前の児童生徒の性格的特徴として，友久他（1997）は教師の視点から，「非社交的」などだけでなく，先行研究と比較して，「わがまま」「自己中心的」「非協調的」を指摘している。また，中学生における登校回避感情について，高橋（2018）はBig Five性格特性の観点から「外向性」の低さと「協調性」の低さ，本城他（2006）は「強迫性」「消極性・非社交性」「内弁慶」という性格傾向との関連を明らかにしている。以上の知見を通観すると，不登校・不登校傾向の児童生徒はある種の性格的特徴を持つと考えられる。

これまでに不登校・不登校傾向に関する児童生徒への状態に応じた支援策が報告されている。文部科学省（2016）によると，「『指導の結果登校する又はできるようになった児童生徒』に特に効果のあった学校の措置」をみてみると，中学校において「登校を促すため，電話をかけたり迎えに行くなどした」が最も多く，続いて「家庭訪問を行い，学業や生活面での相談に乗るなど様々な指導・援助を行った」が示されている。また，山本（2007）は，中学生における教師からの不登校支援として，「関係維持（例：電話連絡や家庭訪問を行った）」「別室登校」などを挙げており，特に「自己主張」ができない生徒の場合には学習指導・生活指導を行うとともに，家族を支えることが有効であり，「強迫傾向」が強い場合には別室登校をさせるとともに，家族を支え，校外の専門機関との連携を図ることが有効であるとされている。そして岸田（2012）は，前述の山本（2007）における不登校支援の分類に基づいて支援項目を作成し，実際に教師が行った支援の実施率について調査を行っている。その結果，「教育相談（例：普段から児童生徒の不安や心配事の話を聞いたり，相談にのったりしていた）」「欠席への配慮（例：欠席の回数やその休み方などに注意を払っていた）」を含む予防的支援の実施率が中学生において最も高く，次いで「意欲喚起（例：将来の夢や進路について助言した）」「児童生徒支持（例：傾聴することで，児童生徒を支えた）」を含む心的支援の割合が高くなっていた。

また，学校以外における支援として，友人や家族からのソーシャルサポートと不登校傾向・登校回避感情との関係が報告されている。ソーシャルサポートの種類については，従来様々な分類がなされているが，浦（1992）によると，道具的サポートと情緒的なサポートに大別することができる。道具的サポートは「問題を解決するための具体的な資源を提供したり，解決のための情報を提供するサポート」を意味し，情緒的サポートは「問題に直面している人の傷つきや喜び等，情緒面に働きかけたり，行動や考えを是認するサポート」を意味する（細田・田嶌，2009）。五十嵐（2009）によると，中学生での友人を中心とした学校生活におけるソーシャルサポートが増加することによって，不登校傾向が低減する可能性が示されている。木原他（2004）は，中学生について，道具的サポートの内容を含む物理的サポートの多さよりも情緒的内容を含む心理的サポートの多さの方が登校回避感情の低さと関連があることを明らかにしており，その中でも家族や友人からの心理的サポートが重要であることが示唆されている。菊島（1999）によると，不登校感情群（学校が嫌だと思うことがよくあった群）の中学生においては，家族や友人からの道具的サポートと，友人や教師からの情緒的サポートが少ないことも明らかとなっている。

以上のように，不登校・不登校傾向に関する生徒の性格的特徴および周囲からの支援について，様々な観点から報告されている。文部科学省（2022b）が作成した生徒指導の基本書である生徒指導提要では，不登校の児童生徒への具体的な対応策を検討するにあたって，パーソナリティ等の心理学的要因を理解することが重要視されている。この点を鑑みると，中学生の不登校傾向への対応にあたっても，性格的特徴を踏まえた支援は重要であると考えられる。しかし従来，性格的特徴と支援との関連については十分に検討されていない。

そこで本研究では，不登校傾向の中学生における性格的特徴と周囲からの支援について整理し，その関連について実証的に検討することを目的とする。このような研究は，不登校傾向を持つ児童生徒の心理学的要因の理解という面だけでなく，不登校支援の実際という面からも意義があると考えられる。

方　法

調査協力者

首都圏の国立大学 1 校と私立大学 3 校に所属する大学生 289 人（男性 124 名，女性 162 名，その他 3 名，平均年齢 20.00 歳，SD＝2.14）を調査協力者とした。

調査時期

2022 年 10 月から 12 月および 2023 年 7 月から 8 月にかけて実施した。

手続き

質問紙調査を実施した。調査協力者に対しては次の説明を文書と口頭で行い，同意する者を対象とした。すなわち，個人のプライバシーが守られること，回答は研究以外の目的には使用しないこと，研究終了後は回答用紙を調査者が責任を持って処分すること，参加は自由であり決して強制ではなく研究への参加を途中で中止したいと思った場合にはいつでも中止できることなどである。なお，本研究は，横浜国立大学の研究倫理専門委員会の承認（非医−2022−16，2022 年 10 月 20 日）を得て行われた。

調査内容

質問紙の概要は以下のとおりである。

1．フェイスシート

年齢と性別の記入を求めた。

2．不登校傾向の有無

中学生当時を思い出してもらい，「学校に行きたくない」という気持ちを持った経験があるかどうかについて，「あり」または「なし」で回答を求めた。

3．中学生当時の性格的特徴について

（2.で「はい」と回答をした者を対象に）当時の性格的特徴について自由記述形式で回答を求めた。

4．中学生当時に受けた周囲からの支援について

（2.で「はい」と回答をした者を対象に）当時受けた周囲からの対応について自由記述形式で回答を求めた。

調査方法

本調査では菊島（1997）および岩瀧（2009）を参考に，回顧法を用いて回答を求めた。不登校状態にある生徒は自らの不登校の誘因・原因や葛藤を意識化することができない可能性があり，回顧法によるアプローチが体験をより意識化でき，自己評価しやすいことが従来指摘されている（本城他，2007；菊島，1997；野島・三好，2004）。本調査においても同様の理由で回顧法を採用した。

質問紙における調査内容「3．中学生当時の性格的特徴について」では，一般的な性格検査を使用することは控えた。前述のように，不登校・不登校傾向の児童生徒の性格的特徴については，一般的な性格検査では十分に捉えることのできない要素が報告されている。このことから，不登校傾向の中学生における性格的特徴を把握するためには，一般的な性格分類にとらわれない方法で回答を得ることが望ましいと考え，

本調査では自由記述形式による性格的特徴の把握を行った。また，「性格」という用語は日常語となっており，広辞苑第七版によれば，性格は「各個人に特有の，ある程度持続的な，感情・意志の面での傾向や性質。ひとがら。」（新村（編），2018）と定義されている。そこで本調査においては，調査協力者に辞書的定義を示した上で中学生当時の性格的特徴について回答を求めた。

また，調査内容「4. 中学生当時に受けた周囲からの支援について」では，文部科学省（2019）は，不登校児童生徒の支援において，不登校の「予兆への対応」が必要であることを指摘している。不登校傾向は不登校の予兆になりうるため，広く「対応」という用語を使い，周囲からの対応の内容について回答を求めた。

結果と考察

本研究では，質問紙において中学生当時の不登校傾向の有無を尋ねた項目に対し，「あり」と回答した 165 名（57.1%）を分析対象者とした。

質問紙で得られた性格的特徴と周囲からの対応の内容についてそれぞれ，心理学を専攻する大学院生 4 名で KJ 法（川喜田，1967，1970）を援用したカテゴリー分類を行った。周囲からの対応については，はじめに分類を行った性格的特徴ごとにカテゴリー分類を行った。なお，周囲からの対応については，自分に対応する相手が大きく学級担任，友人，家族の三者に分類されたため，その相手ごとに対応内容についてカテゴリー分類を行った。また，得られた性格的特徴と三者それぞれの対応内容との関連を調べるために，性格的特徴ごとの対応内容の数を表に整理し，コレスポンデンス分析を行った。コレスポンデンス分析とは，クロス集計表を構成する 2 つの項目のカテゴリーを数量化する解析手法であり，数量化されたカテゴリーを散布図にプロットすることで，カテゴリー間の関係を視覚的に把握することが可能となる（菅，2017）。また散布図において，関連の強いカテゴリーは近くに，弱いカテゴリーは遠くにプロットされ，異なる項目間のカテゴリーの位置関係は原点からの方向で判断される。つまり，原点から見て同じ方向にあれば，一見距離があっても，同様の意味付けができるとされている（宮城県農業・園芸総合研究所，2014 など）。

中学生当時の性格的特徴

中学生時代に不登校傾向を示した 165 名のうち，性格的特徴について回答した者は，162 名（98.2%）であり，切片数は 261 個であった。以下の【　】はカテゴリー，＜　＞はサブカテゴリーである。また，切片例は本文では「　」で示した。カテゴリー分類を行った結果，【誠実性】【社交性】【自己中心性】【内向性】の 4 つのカテゴリーおよび 7 つのサブカテゴリーに分類された（Table 1）。なお，回答者のうち，性格的特徴が 1 つである者は 4 パターン存在し，性格的特徴が 2 つ組み合わされる者が 6 パターン存在し，3 つ組み合わされる者が 3 パターン存在し，合計 13 パターンが得られた（Table 2）。性格的特徴のパターンは本文では【　】で示した。

【誠実性】は，「真面目」「正義感が強い」などの，実直で忠実な傾向を表す性格的特徴であった。

【社交性】は，他者との交流を厭わず，人付き合いが上手な傾向を表す性格的特徴であった。「明るい」「おしゃべり」などの＜活発＞，「友達思い」「親しみやすい」などの＜友好＞の 2 つのサブカテゴリーから構成された。

【自己中心性】は，自分の考えや気分を軸に物事を考え行動を起こす傾向を表す性格的特徴であった。「融通が利かない」「こだわりが強い」などの＜固執的＞，「自分勝手」「他人を思いやらない」などの＜自分本位＞，「暴力的」「短気」などの＜感情的＞などの 3 つのサブカテゴリーから構成された。

【内向性】は，他者からの視線に敏感で，控えめな傾向を表す性格的特徴であった。「傷つきやすい」「嫌われたくない」などの＜繊細＞，「人見知り」「引っ込み思案」などの＜消極的＞の 2 つのサブカテゴリーから構成された。

上記の【自己中心性】【内向性】については，吉中・工藤（2015）および友久他（1997）が指摘している不登校・不登校傾向に関する性格的特徴と同様の特徴であったが，【社交性】については，従来の研究ではあまり見られない特徴であった。これは本研究において，不登校傾向を比較的広く捉えたことが一因であると考えられる。

Table 1
性格的特徴のカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー	切片例
【誠実性】（98）	—	真面目
		正義感が強い
【社交性】（76）	＜活発＞	明るい
		おしゃべり
	＜友好＞	友達思い
		親しみやすい
【自己中心性】（48）	＜固執的＞	融通が利かない
		こだわりが強い
	＜自分本位＞	自分勝手
		他人を思いやらない
	＜感情的＞	暴力的
		短気
【内向性】（39）	＜繊細＞	傷つきやすい
		嫌われたくない
	＜消極的＞	人見知り
		引っ込み思案

注）（ ）は切片数である。

Table 2
性格的特徴のパターン

性格的特徴*1	該当数
【誠実性】	23
【社交性】	23
【自己中心性】	15
【内向性】	17
【誠実性＋社交性】	32
【誠実性＋自己中心性】	6
【誠実性＋内向性】	18
【社交性＋自己中心性】	10
【社交性＋内向性】	1
【自己中心性＋内向性】	6
【誠実性＋社交性＋自己中心性】	4
【誠実性＋社交性＋内向性】	6
【誠実性＋自己中心性＋内向性】	1

*1 性格的特徴について，上から 1～4 番目は性格的特徴が 1 つの者，5～10 番目は 2 つ組み合わされる者，11～13 番目は 3 つ組み合わされる者である。

学級担任からの対応

「学級担任からの対応」について回答した者は，性格的特徴について回答した 162 名のうち 37 名（22.8%）であり，切片数（対応内容の数）は 42 個であった。以下の〔　〕はカテゴリーである。切片例は本文では「　」で示し，声かけの内容は「　」内に『　』で示した（友人からの対応および家族からの対応についても同様に表記する）。

ここで回答した者の性格的特徴については，【誠実性】【社交性】【自己中心性】【内向性】【誠実性＋社交性】【誠実性＋自己中心性】【誠実性＋内向性】【社交性＋自己中心性】【誠実性＋社交性＋自己中心性】の 9 パターンであった。これらの性格的特徴ごとに対応内容についてカテゴリー分類を行った結果，それぞれ導出されたカテゴリーを全てあわせて示すと，〔相談対応〕〔受容〕〔状況把握〕〔関係維持〕〔励まし〕〔注意〕〔別室登校〕の 7 つであった（Table 3）。

〔相談対応〕は，「個別面談をしてくれた」「話を聞いてくれた」などの，本人の気持ちに耳を傾け，抱えている問題について個別で話せる機会を設定したという対応を表す内容であった。

〔受容〕は，「『何かあれば言ってね』」「『無理しないでね』」などの，本人の気持ちに寄り添い，いつでも助けを求めてよいということを伝えるための声かけを表す内容であった。

〔状況把握〕は，「『何があった？』」「『疲れてそうだね？』」などの，本人を気にかけ，その時の詳しい状況を確認する声かけを表す内容であった。

〔関係維持〕は，「家庭訪問をしてくれた」「電話が来た」などの，本人とのつながりを維持するための対応を表す内容であった。

〔励まし〕は，「『応援してるよ』」「『頑張ってね』」などの，本人の背中を押し，前向きな気持ちにさせる声かけを表す内容であった。

〔注意〕は，「『～してはいけない』」「『～するな』」という，本人の行動や態度を改めさせる声かけを表す内容であった。

〔別室登校〕は，「図書室での応対」という，教室とは別の場所を設けて行う，本

人のペースに合わせた対応を表す内容であった。

上記の〔関係維持〕と〔別室登校〕などについては，山本（2007）および文部科学省（2014）で示された，不登校支援における有効な支援と類似する。〔相談対応〕〔受容〕〔励まし〕などは情緒的サポートと考えられる対応であり，本人の気持ちに寄り添った声かけや状況構築のための対応であると解釈される。

学級担任からの対応について，Table 4 を見てわかるように，性格的特徴が 1 つの者はそれぞれ 3～4 タイプの対応を受け，2 つ組み合わされる者はそれぞれ 1～4 タイプの対応を受け，3 つ組み合わされる者は 1 タイプの対応を受けたことを表す。まず，性格的特徴が 1 つの者については，【誠実性】では〔相談対応〕〔受容〕〔関係維持〕〔別室登校〕の対応を受け，【社交性】では〔相談対応〕〔受容〕〔状況把握〕〔励まし〕の対応を受け，【自己中心性】では〔相談対応〕〔状況把握〕〔注意〕の対応を受け，【内向性】では〔相談対応〕〔受容〕〔励まし〕の対応を受けたことが示された。性格的特徴が 2 つ組み合わされる者については，【誠実性＋社交性】では〔受容〕〔状況把握〕〔励まし〕の対応を受け，【誠実性＋自己中心性】と【誠実性＋内向性】では〔相談対応〕を受け，【社交性＋自己中心性】では〔相談対応〕〔受容〕〔関係維持〕〔注意〕の対応を受けたことが示された。性格的特徴が 3 つ組み合わされる者については，【誠実性＋社交性＋自己中心性】で〔状況把握〕の対応が確認された。

次に，中学生当時の性格的特徴と学級担任からの対応の関係性を検討するために，Table 4 における性格的特徴の 9 パターンを行項目，学級担任からの対応の 7 タイプを列項目としたコレスポンデンス分析を行った（Figure 1）。その結果，抽出された 4 つの次元のうち，次元 1 と次元 2 のイナーシャの寄与率はそれぞれ 37.4%，29.3%であり，2 つの次元で全体のデータが 66.7%説明された。

Figure 1 を見ると，【誠実性】は〔関係維持〕〔別室登校〕と関連を示し，【社交性】【内向性】は〔励まし〕と関連を示し，【誠実性＋社交性】は〔受容〕〔状況把握〕と関連を示し，【誠実性＋自己中心性】【誠実性＋内向性】は〔相談対応〕と関連を示し，【社交性＋自己中心性】は〔注意〕と関連を示し，【誠実性＋社交性＋自己中心性】は〔状況把握〕と関連を示す傾向が見られた。なお，【自己中心性】について，Figure 1 を見ると，〔励まし〕と同じ方向に位置しており，かつ近接していた。しかし，Table 4 を見ると，【自己中心性】において〔励まし〕は確認されておらず，両者に関連があるとは判断できなかった。

以上より，まず〔相談対応〕については，広範にわたる性格的特徴のパターンにおいて行われている傾向が認められた（Table 4）。しかし，その中でも【誠実性＋自己中心性】【誠実性＋内向性】という性格的特徴のパターンとの関連が示唆された（Figure 1）。また，〔受容〕〔状況把握〕〔励まし〕という本人の気持ちを支持する声かけについて，比較的幅広い性格的特徴のパターンと関連を示す傾向が見られた（Figure 1）。文部科学省（2021）は，不登校支援において，実際に休み始めるまでに児童生徒の変化に気づき，教師から児童生徒に声かけや話を聞いたりすることが求められるとしており，本研究の結果からも性格的特徴を問わず，学級担任が〔相談対応〕や生徒の気持ちを支持する声かけを重視していることが示唆された。

続いて，〔関係維持〕〔別室登校〕については，【誠実性】との関連が示された（Figure 1）。つまり真面目で忠実な生徒においては，不登校傾向になった際に家庭訪問や別室での応対などの，学級担任からの積極的な介入を受けやすい可能性がある。最後に〔注意〕については，【自己中心性】【社交性＋自己中心性】という性格的特徴のパターンにおいて行われており（Table 4），その中でも【社交性＋自己中心性】と関連を示す傾向が見られた（Figure 1）。この結果は，【自己中心性】における＜自分本位＞＜感情的＞という性格的特徴から起こる行動が，学級担任からの〔注意〕という対応を招きやすいことを意味している可能性がある。

Table 3
学級担任からの対応のカテゴリー

学級担任からの対応	切片例
〔相談対応〕（14）	個別面談をしてくれた
	話を聞いてくれた
〔受容〕（13）	「何かあれば言ってね」
	「無理しないでね」
〔状況把握〕（6）	「何があった？」
	「疲れてそうだね？」
〔関係維持〕（3）	家庭訪問をしてくれた
	電話が来た
〔励まし〕（3）	「応援してるよ」
	「頑張ってね」
〔注意〕（2）	「～してはいけない」
	「～するな」
〔別室登校〕（1）	図書室での応対

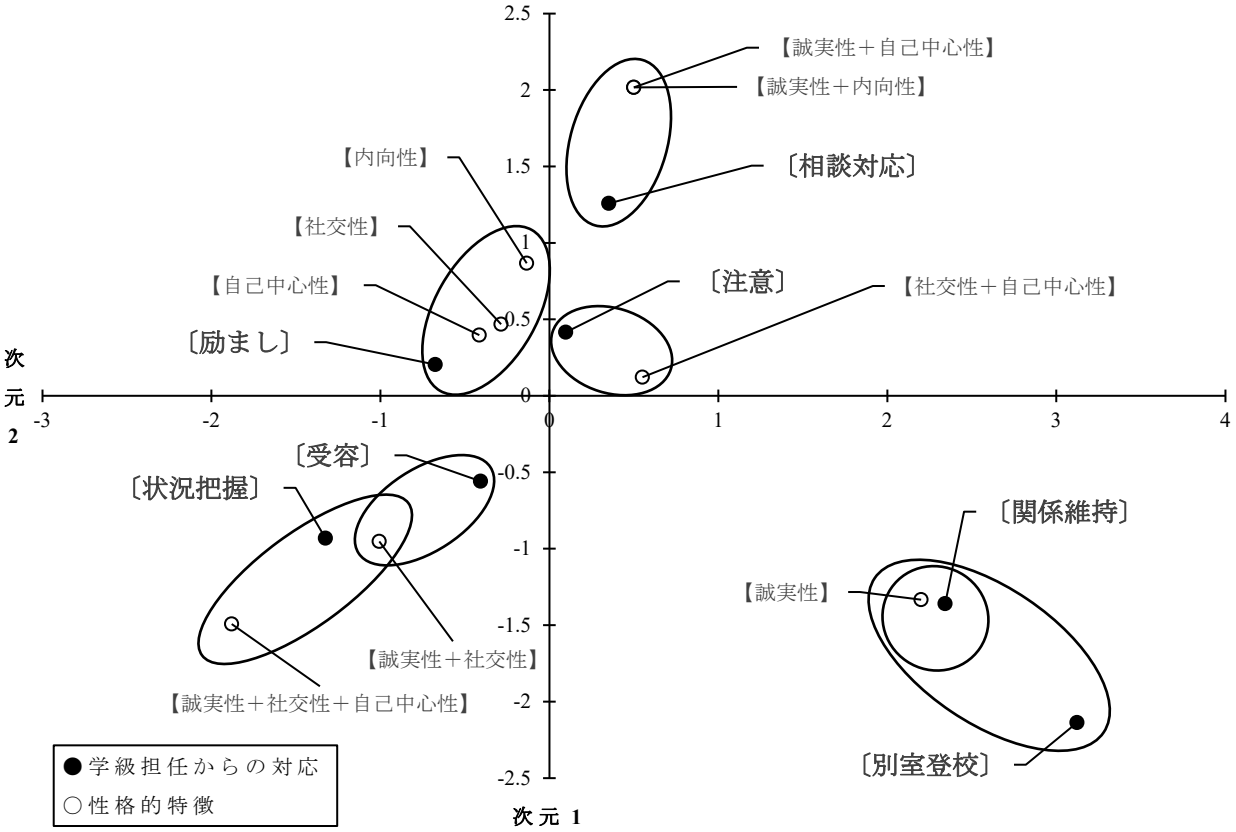
注）（ ）は切片数である。

Table 4
性格的特徴ごとの学級担任からの対応数

性格的特徴*1	学級担任からの対応						
	〔相談対応〕	〔受容〕	〔状況把握〕	〔関係維持〕	〔励まし〕	〔注意〕	〔別室登校〕
【誠実性】	1	1	0	2	0	0	1
【社交性】	4	3	1	0	1	0	0
【自己中心性】	1	0	1	0	0	1	0
【内向性】	2	1	0	0	1	0	0
【誠実性＋社交性】	0	6	3	0	1	0	0
【誠実性＋自己中心性】	2	0	0	0	0	0	0
【誠実性＋内向性】	2	0	0	0	0	0	0
【社交性＋自己中心性】	2	2	0	1	0	1	0
【誠実性＋社交性＋自己中心性】	0	0	1	0	0	0	0

*1 性格的特徴について，上から 1～4 番目は性格的特徴が 1 つの者，5～8 番目は 2 つ組み合わされる者，9 番目は 3 つ組み合わされる者である。上記の表では，学級担任からの対応についての回答が未記入であった性格的特徴のパターンは省略した。

Figure 1
性格的特徴と学級担任からの対応の関係



友人からの対応

「友人からの対応」について回答した者は，性格的特徴について回答した162名のうち 28 名（17.3%）であり，切片数（対応内容の数）は 33 個であった。また，ここで回答した者の性格的特徴については，【誠実性】【社交性】【自己中心性】【内向性】【誠実性＋社交性】【誠実性＋自己中心性】【誠実性＋内向性】【社交性＋自己中心性】【誠実性＋社交性＋内向性】の 9 パターンであった。これらの性格的特徴ごとに対応内容についてカテゴリー分類を行った結果，それぞれ導出されたカテゴリーを全てあわせて示すと，〔受容〕〔相談対応〕〔親身〕〔励まし〕〔状況把握〕の 5 つであった（Table 5）。

〔受容〕は，「『あなたの味方だよ』」「『大丈夫だよ』」などの，本人の気持ちに寄り添い，安心を促す声かけを表す内容であった。

〔相談対応〕は，「相談に乗ってくれた」「話を聞いてくれた」などの，本人の気持ちに耳を傾け，抱えている問題について話せる機会を設定したという対応を表す内容であった。

〔親身〕は，「ずっと一緒にいてくれた」「長時間電話をしてくれた」などの，相談の有無に関わらず，親密な関わりを通して本人の気持ちを支えたという対応を表す内容であった。

〔励まし〕は，「『あと少しだから頑張ろう』」「『一緒に頑張ろう』」などの，共に前を向き，本人の気持ちを鼓舞する声かけを表す内容であった。

〔状況把握〕は，「『大丈夫？』」「『疲れてそうだね？』」という，本人を気にかけ，その時の詳しい状況を確認しようとする声かけを表す内容であった。

以上の結果は，情緒的サポートと考えられる内容と共通しており，本人の気持ちを支持する対応が行われていることが示された。

上記の友人からの対応について，性格的特徴が 1 つの者はそれぞれ 1～5 タイプ，2 つ組み合わされる者はそれぞれ 1～4 タイプ，3 つ組み合わされる者は 1 タイプの対応を受けたことを表す（Table 6）。まず，性格的特徴が 1 つの者については，【誠実性】で〔受容〕〔相談対応〕〔励まし〕の対応を受け，同様に，【社交性】で〔受容〕の対応を，【自己中心性】で〔親身〕の対応を，【内向性】で〔受容〕〔相談対応〕〔親身〕〔励まし〕〔状況把握〕の対応を受けたことが示された。性格的特徴が 2 つ組み合わされる者は，【誠実性＋社交性】で〔受容〕〔親身〕〔励まし〕〔状況把握〕の対応を，【誠実性＋自己中心性】で〔受容〕の対応を，【誠実性＋内向性】で〔受容〕〔相談対応〕〔励まし〕の対応を，【社交性＋自己中心性】で〔受容〕〔相談対応〕を受けたことが示された。性格的特徴が 3 つ組み合わされる者については，【誠実性＋社交性＋内向性】で〔受容〕の対応が確認された。

次に，中学生当時の性格的特徴と友人からの対応の関係性を検討するために，Table 6 における性格的特徴の 9 パターンを行項目，友人からの対応の 5 タイプを列項目としたコレスポンデンス分析を行った（Figure 2）。その結果，抽出された 4 つの次元のうち，次元 1 と次元 2 のイナーシャの寄与率はそれぞれ 54.1%，32.2%であり，2 つの次元で全体のデータが 86.3%説明された。

Figure 2 を見ると，【誠実性】【誠実性＋内向性】は〔相談対応〕〔励まし〕と関連を示し，【社交性】【誠実性＋自己中心性】【誠実性＋社交性＋内向性】は〔受容〕と関連を示し，【自己中心性】は〔親身〕と関連を示し，【誠実性＋社交性】は〔状況把握〕と関連を示し，【社交性＋自己中心性】は〔相談対応〕と関連を示す傾向が見られた。【内向性】については，Figure 2 において原点から見て同じ方向かつ近接する対応は確認されず，他の性格的特徴と比べて，特に関連があると考えられる友人からの対応は認められなかった。これは，【内向性】において友人からの対応の全タイプが確認されていることに起因し（Table 6），友人からはタイプに関わらず対応を受けている可能性がある。

以上の結果より，〔受容〕〔励まし〕〔状況把握〕という友人による支持的な声かけは，【誠実性】が含まれる性格的特徴のパターンを中心に行われていながらも，全体的には幅広い性格的特徴のパターンで見られた。文部科学省（2021）の不登校生徒への調査によると，学校に行きづらいなどの気持ちを持っていたときに，どのようなことがあれば休まなかったかという質問に対し，「特にない」という回答を除くと，「学校の友達からの声かけ」と回答とした中学生が約 20％であり，他の対応と比べて最も高いことが示された。また，矢澤（2023）は，不登校生徒に対する周囲の生徒からの望ましい対応として，「特別扱いすることがない周りによる自然な対応と声かけ」を挙げていた。したがって，友人からの支持的な声かけは，特定の性格的特徴に限らず求められる可能性がある。

その一方で，〔親身〕については，原点からの距離が遠く，独特な対応であり，【自己中心性】との関連が認められた（Figure 2）。橋詰（2010）は，「中学生という時期は友人との同質性を求める段階であるため，自分を素直に表現することには困難が伴い，本音を話すことができにくい」と述べている。また，文部科学省（2021）の不登校生徒への調査によると，学校に行きづらいなどの気持ちを持っているときに，「仲の良い友達がいた」と回答した中学生は約 80%と高い割合であったにもかかわらず，当時相談した相手について「友達」と回答した中学生の割合は約 10%と低く，「学校の先生」「家族」と比べても低いことが示された。このことから，一般的な中学生においては，たとえ仲の良い友人関係であっても，抱えている悩みや不安についての相談のしにくさが少なからず存在していることが考えられる。しかし前述の結果より，【自己中心性】においては友人からの親密な関わりを通した対応が確認されており，自己中心的ゆえに，他の性格的特徴と比べて友人への自己開示を行いやすく，親身な対応を受けやすい可能性が考えられる。

Table 5
友人からの対応のカテゴリー

友人からの対応	切片例
〔受容〕（15）	「あなたの味方だよ」
	「大丈夫だよ」
〔相談対応〕（7）	相談に乗ってくれた
	話を聞いてくれた
〔親身〕（5）	ずっと一緒にいてくれた
	長時間電話をしてくれた
〔励まし〕（4）	「あと少しだから頑張ろう」
	「一緒に頑張ろう」
〔状況把握〕（2）	「大丈夫？」
	「疲れてそうだね？」

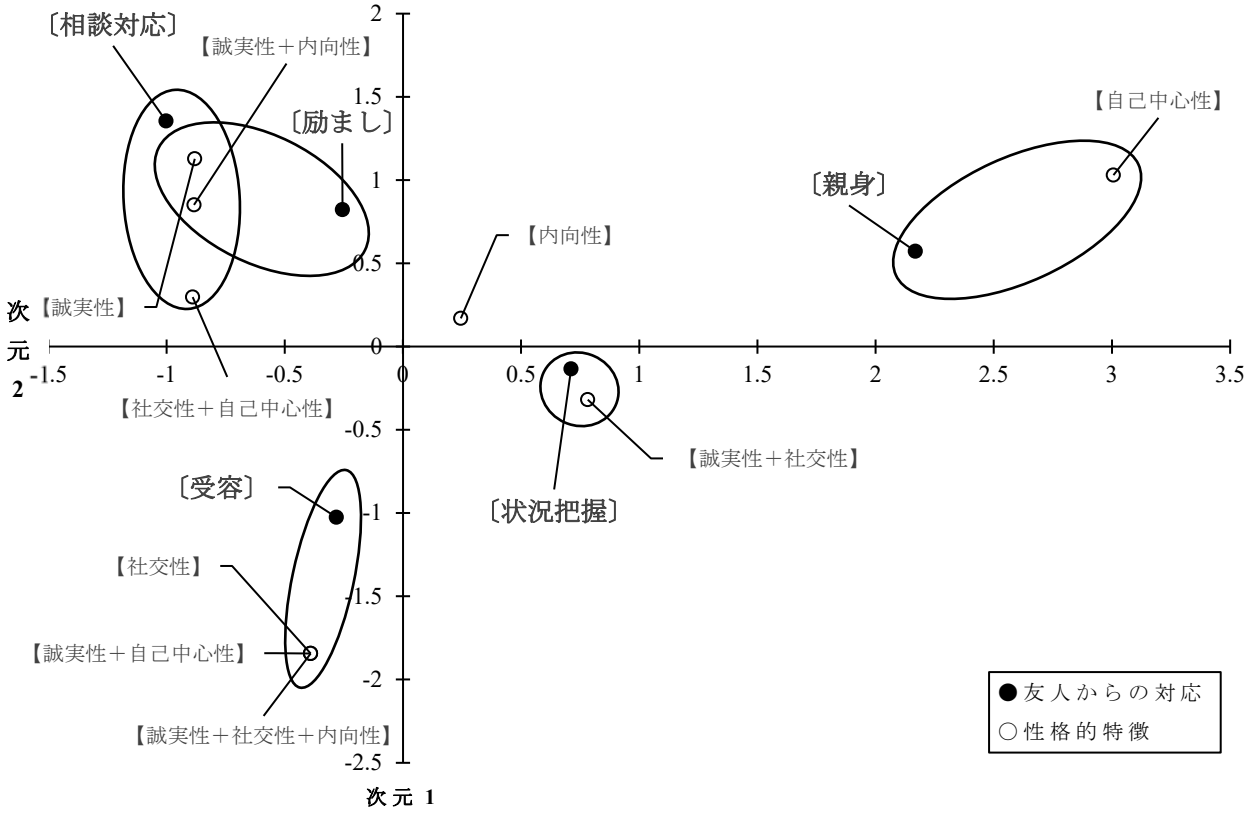
注）（ ）は切片数である。

Table 6
性格的特徴ごとの友人からの対応数

性格的特徴*1	友人からの対応				
	〔受容〕	〔相談対応〕	〔親身〕	〔励まし〕	〔状況把握〕
【誠実性】	1	2	0	1	0
【社交性】	2	0	0	0	0
【自己中心性】	0	0	2	0	0
【内向性】	2	1	1	1	1
【誠実性＋社交性】	3	0	2	1	1
【誠実性＋自己中心性】	2	0	0	0	0
【誠実性＋内向性】	2	3	0	1	0
【社交性＋自己中心性】	1	1	0	0	0
【誠実性＋社交性＋内向性】	2	0	0	0	0

*1 性格的特徴について，上から 1～4 番目は性格的特徴が 1 つの者，5～8 番目は 2 つ組み合わされる者，9 番目は 3 つ組み合わされる者である。上記の表では，友人からの対応についての回答が未記入であった性格的特徴のパターンは省略した。

Figure 2
性格的特徴と友人からの対応の関係



家族からの対応

「家族からの対応」について回答した者は，性格的特徴について回答した162名のうち 47 名（29.0%）であり，切片数（対応内容の数）は 53 個であった。また，ここで回答した者の性格的特徴については，【誠実性】【社交性】【自己中心性】【内向性】【誠実性＋社交性】【誠実性＋自己中心性】【誠実性＋内向性】【社交性＋自己中心性】【自己中心性＋内向性】【誠実性＋社交性＋内向性】の 10 パターンであった。これらの性格的特徴ごとに対応内容についてカテゴリー分類を行った結果，それぞれ導出されたカテゴリーを全てあわせて示すと，〔受容〕〔相談対応〕〔登校の促し〕〔回避状況の構築〕〔協力〕〔助言〕〔状況把握〕の 7 つのカテゴリーであった（Table 7）。

〔受容〕は，「『無理して学校に行かなくてもいいからね』」「味方でいてくれた」などの，本人の「学校に行きたくない」という気持ちを支持する声かけや態度の内容であった。

〔相談対応〕は，「相談に乗ってくれた」「話を聞いてくれた」などの，本人の気持ちに耳を傾け，抱えている問題について話せる機会を設定したという対応の内容であった。

〔登校の促し〕は，「『頑張って学校に行きなさい』」「『学校は休むな』」などの，登校または登校の継続を勧める声かけや態度の内容であった。

〔回避状況の構築〕は，「欠席を許可してくれた」「学校を休ませてくれた」などの，本人が学校から距離を置き，心身を休ませることができるようにしたという対応の内容であった。

〔協力〕は，「親が一緒に学校まで来てくれた」「親が先生に話しに行ってくれた」などの，本人の抱える問題を緩和または解決するための積極的な対応を表す内容であった。

〔助言〕は，「『～してみたら』とアドバイスをくれた」「『～すると良いよ』」という，本人の抱える問題を緩和または解決するための情報を示す声かけを表す内容であった。

〔状況把握〕は，「『何があった？』」という，本人を気にかけ，その時の詳しい状況を確認しようとする声かけを表す内容であった。

〔受容〕〔相談対応〕〔回避状況の構築〕〔状況把握〕は情緒的サポート，〔登校の促し〕〔協力〕〔助言〕は道具的サポートにあたる対応と考えられる。この結果から，家族において，子供の気持ちに寄り添った対応だけでなく，問題解決にあたっての直接的な介入や手助けも行われていることが示唆された。

上記の家族からの対応について，性格的特徴が 1 つの者はそれぞれ 2～3 タイプ，2 つ組み合わされる者はそれぞれ 1～5 タイプ，3 つ組み合わされる者では 3 タイプの対応内容が認められた（Table 8）。まず，性格的特徴が 1 つの者については，【誠実性】で〔受容〕〔相談対応〕〔登校の促し〕の対応を受け，同様に，【社交性】で〔受容〕〔協力〕の対応を，【自己中心性】で〔受容〕〔相談対応〕〔回避状況の構築〕の対応を，【内向性】で〔受容〕〔相談対応〕〔回避状況の構築〕の対応を受けたことが示された。性格的特徴が 2 つの者については，【誠実性＋社交性】で〔受容〕〔相談対応〕〔登校の促し〕〔協力〕〔助言〕の対応を，【誠実性＋自己中心性】で〔受容〕の対応を，【誠実性＋内向性】で〔受容〕〔相談対応〕〔登校の促し〕〔回避状況の構築〕〔助言〕の対応を，【社交性＋自己中心性】で〔受容〕〔相談対応〕〔状況把握〕の対応を，【自己中心性＋内向性】で〔受容〕の対応を受けたことが示された。性格的特徴が 3 つ組み合わされる者については，【誠実性＋社交性＋内向性】で〔受容〕〔登校の促し〕〔協力〕の対応が確認された。

次に，中学生当時の性格的特徴と家族からの対応の関係性を検討するために，Table 8 における性格的特徴の 10 パターンを行項目とし，家族からの対応の 7 タイプを列項目としたコレスポンデンス分析を行った（Figure 3）。その結果，抽出された 4 つの次元のうち，次元 1 と次元 2 のイナーシャの寄与率はそれぞれ 33.9%，32.3%であり，2 つの次元で全体のデータが 66.2%説明された。

Figure 3 を見ると，【誠実性】【誠実性＋社交性】【誠実性＋自己中心性】【自己中心性＋内向性】は〔受容〕と関連を示し，同様に，【社交性】【誠実性＋社交性＋内向性】は〔協力〕と，【自己中心性】は〔回避状況の構築〕と，【内向性】は〔相談対応〕と，【誠実性＋内向性】は〔助言〕〔登校の促し〕と，【社交性＋自己中心性】は〔状況把握〕と関連を示す傾向が見られた。

以上の結果より，〔受容〕〔相談対応〕〔回避状況の構築〕〔状況把握〕という子供の気持ちに寄り添った対応は，【自己中心性】が含まれる性格的特徴のパターンを中心に行われていながらも，全体的には幅広い性格的特徴のパターンで見られた。特に〔受容〕については，全ての性格的特徴のパターンにおいて認められた（Table 8）。文部科学省（2021）の不登校生徒への調査によると，学校に行きづらいことを相談した相手について，「家族」と回答した中学生の割合が約 50%であり，他の相手と比べ最も高いことが示された。また，前述のように木原他（2004）は，中学生における登校回避感情と心理的サポートとの関連の高さ，および家族からのサポートの重要性を示唆していた。したがって，家族からの情緒的な対応は，特定の性格的特徴に限らず必要とされる可能性があることが考えられる。

その一方で，この結果における〔状況把握〕については，Figure 3 を見ると他の対応と比べて原点からの距離が遠く，独特な対応であり，【社交性＋自己中心性】と関連を示した。社交的かつ自己中心的であるということは，身近にいる家族からは子供の変化を察知しやすいということであり，家族としてはまずは状況を把握するための声かけを行いやすいことを意味する可能性がある。

また，〔登校の促し〕〔協力〕〔助言〕は，家族による問題解決的な対応を表す。〔登

校の促し〕〔助言〕は，【誠実性＋内向性】と関連を示した。真面目で内向的な子供に対しては，家族から登校および登校の継続を期待する対応や問題を改善するためのアドバイスが行われている可能性が示唆される。また，〔協力〕については，【社交性】【誠実性＋社交性＋内向性】と関連を示した。社交性と内向性は一見矛盾するが，Table 8 を見ると，【誠実性＋社交性】でも〔協力〕という対応を受けており，社交的であるという性格的特徴が前面に表れやすい子供に対しては，家族から本人の抱える問題を緩和または解決するための積極的な対応が行われている可能性がある。

Table 7
家族からの対応のカテゴリー

家族からの対応	切片例
〔受容〕（30）	「無理して学校に行かなくていいからね」
	味方でいてくれた
〔相談対応〕（9）	相談に乗ってくれた
	話を聞いてくれた
〔登校の促し〕（5）	「頑張って学校に行きなさい」
	「学校は休むな」
〔回避状況の構築〕（3）	欠席を許可してくれた
	学校を休ませてくれた
〔協力〕（3）	親が一緒に学校まで来てくれた
	親が先生に話しに行ってくれた
〔助言〕（2）	「～してみたら」とアドバイスをくれた
	「～すると良いよ」
〔状況把握〕（1）	「何があった？」

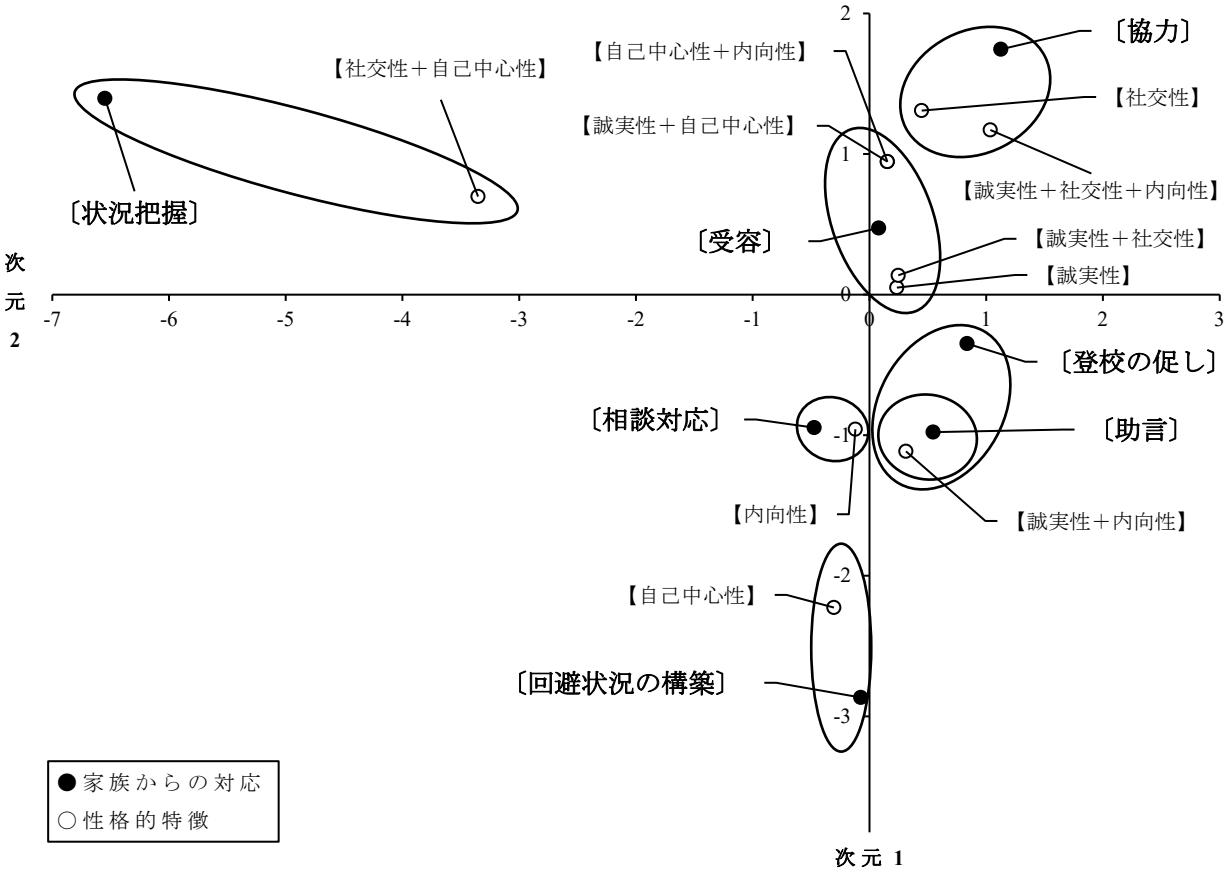
注）（ ）は切片数である。

Table 8
性格的特徴ごとの家族からの対応数

性格的特徴*1	家族からの対応						
	〔受容〕	〔相談対応〕	〔登校の促し〕	〔回避状況の構築〕	〔協力〕	〔助言〕	〔状況把握〕
【誠実性】	3	1	1	0	0	0	0
【社交性】	6	0	0	0	1	0	0
【自己中心性】	1	1	0	1	0	0	0
【内向性】	3	1	0	1	0	0	0
【誠実性＋社交性】	7	3	1	0	1	1	0
【誠実性＋自己中心性】	2	0	0	0	0	0	0
【誠実性＋内向性】	3	2	2	1	0	1	0
【社交性＋自己中心性】	2	1	0	0	0	0	1
【自己中心性＋内向性】	1	0	0	0	0	0	0
【誠実性＋社交性＋内向性】	2	0	1	0	1	0	0

*1 性格的特徴について，上から1～4番目は性格的特徴が1つの者，5～9番目は2つ組み合わされる者，10番目は3つ組み合わされる者である。上記の表では，家族からの対応についての回答が未記入であった性格的特徴のパターンは省略した。

Figure 3
性格的特徴と家族からの対応の関係



まとめと今後の課題

本研究では，大学生を対象に回顧法による質問紙調査を行い，中学生当時の性格的特徴と周囲から受けた対応について整理し，その関連について検討した。その結果は以下の 4 点に要約される。

第 1 に，中学生当時の性格的特徴については，【誠実性】【社交性】【自己中心性】【内向性】など，組み合わせを含めると 13 パターンが確認された。

第 2 に，学級担任からの対応については，情緒的サポートと考えられる〔相談対応〕〔受容〕〔状況把握〕〔励まし〕という対応に加えて，〔関係維持〕〔別室登校〕という積極的な介入や〔注意〕という対応が確認された。その中でも〔相談対応〕〔受容〕〔状況把握〕〔励まし〕については，比較的広範にわたる性格的特徴のパターンで見られた。また，〔注意〕は【社交性＋自己中心性】と関連を示し，〔関係維持〕〔別室登校〕は【誠実性】と関連を示した。

第 3 に，友人からの対応については，〔受容〕〔相談対応〕〔親身〕〔励まし〕〔状況把握〕という情緒的サポートと考えられる対応が確認された。その中でも，〔受容〕〔励まし〕〔状況把握〕という友人による支持的な声かけは，全体的には幅広い性格的特徴のパターンで見られた。また，〔親身〕は【自己中心性】と関連を示した。

第 4 に，家族からの対応については，〔受容〕〔相談対応〕〔回避状況の構築〕〔状況把握〕という情緒的サポートと考えられる対応と，〔登校の促し〕〔協力〕〔助言〕という道具的サポートと考えられる対応が確認された。〔受容〕〔相談対応〕〔回避状況の構築〕〔状況把握〕については，全体的には幅広い性格的特徴のパターンで見られた。また，〔登校の促し〕〔助言〕は【誠実性＋内向性】と関連を示し，〔協力〕については，【社交性】【誠実性＋社交性＋内向性】と関連を示した。

以上の結果より，中学生当時の性格的特徴と周囲から受けた対応は一定の関連を持つことが示唆された。なお，本研究における知見は，周囲からの対応を受けた側の回答によって得られたデータの分析結果であるため，今後は対応を行う側にも回答を求め，性格的特徴と周囲からの支援との関連について，さらに検討を深める必要がある。

引用文献

有賀 美恵子・鈴木 英子・多賀 谷昭（2010）．不登校傾向に関する研究の動向と課題　長野県看護大学紀要，*12*，43-60.

橋詰 郁恵（2007）．中学生における“自己”および“友人”のみせかけの自己表現に対する認知とストレス反応の関連　九州大学心理学研究，*11*，185-193.

本城 秀次・小倉 正義・笛吹 素子・村瀬 聡美・金子 一史・田中裕子（2007）．ひきこもりに関する研究――不登校の登校回避感情，パーソナリティ特性との関連から――　厚生労働科学研究費補助金　こころの健康科学研究事業　思春期・青年期の「ひきこもり」に関する精神医学的研究　平成 18 年度　総括・分担研究報告書，55-58.

細田 絢・田嶌 誠一（2009）．中学生におけるソーシャルサポートと自他への肯定感に関する研究　教育心理学研究，*57*，309-323.

五十嵐 哲也（2009）．小中学生の不登校傾向とソーシャルサポートとの関連　愛知教育大学保健環境センター紀要，*8*，3-9.

五十嵐 哲也（2010）．小学生用不登校傾向尺度の作成と信頼性・妥当性に関する検討　愛知教育大学教育実践総合センター紀要，*13*，211-216.

岩瀧 大樹（2009）．中学校 3 年間の悩みおよび教師への援助要請経験に関する研究――大学生を対象とした回想法による検討――　學苑（昭和女子大学），*823*，74-87．
川喜田 二郎（1967）．発想法――創造性開発のために――　中央公論新社
川喜田 二郎（1970）．続・発想法――KJ 法の展開と応用――　中央公論新社
木原 律・三浦 正江・田中 信利（2004）．中学生の登校回避感情とソーシャルサポートに関する検討　広島国際大学心理臨床センター紀要，*2*，38-46．
菊島 勝也（1999）．ストレッサーとソーシャルサポートが中学時の不登校傾向に及ぼす影響　性格心理学研究，*7*，66-76．
岸田 幸弘（2012）．不登校児童生徒への支援に関する教師の意識調査　学苑・人間社会学部紀要，*856*，28-36．
北村 陽英・加藤 綾子（2007）．高等学校不登校・保健室登校・中途退学の経過研究――社会的ひきこもりを視野に入れた養護教諭による調査より――　奈良教育大学紀要，*56*(2)，21-28．
宮城県農業・園芸総合研究所（2014）．農産物マーケティング活動の手引き 2　宮城県農業・園芸総合研究所情報経営部情報チーム　Retrieved September 27, 2023 from https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/res_center/marketing-manual.html
文部科学省（2016）．平成 26 年度児童生徒の問題行動・不登校生徒指導上の諸課題に関する調査結果 文部科学省初等中等教育局児童生徒課　Retrieved August 30, 2023 from https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1302902.htm
文部科学省（2019）．不登校児童生徒への支援のあり方について（通知）　文部科学省初等中等教育局児童生徒課　Retrieved August 30, 2023 from https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1422155.htm
文部科学省（2021）．不登校児童生徒の実態把握に関する調査報告書　不登校児童生徒の実態把握に関する調査企画分析会議　Retrieved September 10, 2023 from https://www.mext.go.jp/content/20211006-mxt_jidou02-000018318_03.pdf
文部科学省（2022a）．令和 3 年度児童生徒の問題行動・不登校生徒指導上の諸課題に関する調査結果 文部科学省初等中等教育局児童生徒課　Retrieved August 30, 2023 from https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1302902.htm
文部科学省（2022b）．生徒指導提要（改訂版）　文部科学省初等中等教育局児童生徒課　Retrieved September 10, 2023 from https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1404008_00001.htm
森田 洋司（1991）．「不登校」現象の社会学　学文社
内閣府（2016）．若者の生活に関する調査報告書　内閣府政策統括官（共生社会政策担当）　Retrieved September 10, 2023 from https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikikomori/h27/pdf-index.html
中村 美詠子・近藤 今子・久保田 晃生・古川 五百子・鈴木 輝康・中村 晴信・早川 徳香・尾島 俊之・青木 伸雄（2010）．不登校傾向と自覚症状，生活習慣関連要因との関連――静岡県子どもの生活実態調査データを用いた検討――　日本公衆衛生雑誌，*57*，881-890．
新村 出（編）（2018）．広辞苑第七版　岩波出版
野島 正剛・三好 和子（2004）．特性不安および生活上のストレスと中学生時の不登校傾向との関連　児童文化研究所所報（上田女子短期大学），*26*，29-41．
小幡 緑・堀井 俊章（2018）．中学生の登校回避感情に対する学級担任の推察と支援　横浜国立大学教育学部紀要 I（教育科学），*4*，183-199．
菅 民郎（2017）．例題と Excel 演習で学ぶ多変量解析――因子分析・コレスポンデンス分析・クラスター分析編――　オーム社

髙橋 淳一郎（2018）．中学生におけるパーソナリティ特性と登校回避感情の関係 日本文理大学商経学会誌，*37*，75-84．
友久 久雄・足立 明久・松下 武志・忠井 俊明・林 徳治・内田 利広・中島 文・児玉 龍治（1997）．学校不適応行動の本態解明とその対応について――不登校前行動をとおして――　京都教育大学紀要．A，人文・社会，*90*，53-69．
浦 光博（1992）．支えあう人と人――ソーシャル・サポートの社会心理学――　サイエンス社
山本 奬（2007）．不登校状態に有効な教師による支援方法　教育心理学研究，*55*，60-71．
吉中 淳・工藤 七央（2015）．不登校研究のこれまでの展開と心理学における展望 弘前大学教育学部紀要，*113*，129-138．
渡辺 葉一・小石 寛文（2000）．中学生の登校回避感情とその規定要因――ソーシャル・サポートとの関連を中心にして――神戸大学発達科学部研究紀要，*8*(1)，1-12．
矢澤 久史（2023）．中学校における不登校生徒に対する一般生徒の反応　名古屋短期大学研究紀要，*61*，77-91．